



魔玄岳の
魔導師

川崎ゆき

魔玄岳と呼ばれる山がある。ただ、地図では別の名になっている。つまり魔玄岳は通称なのだ。その山の腰に、いかがわしい建物がある。異国の寺院で、この地方の様式ではない。

そこに何人かの弟子と共に魔導師が住んでいる。その名はよく知られていることから、訪ねる人も多い。

清武もその一人で、魔玄岳、魔玄堂の魔導師に会いに来た。入門するためだ。

「また、迷い込んだ人が来ました」弟子が伝える。

「そうか、困ったものじゃ」魔導師は眉をしかめるが、慣れたことらしい。

「魔法を覚えたいのですが」清武は真っ先にその用を言う。

「誤解があるようじゃが」

「あなたは魔導師でしょ」

「いかにも」

「それに多くの門弟がいます。私にも魔法を伝授してください」

「そのようなことはやっておらんのですが」

「あなたは魔玄岳の魔導師ではないのですか」

「その名の通りで、間違いはないが、ここは魔法を教える場所ではない」

「では、あなたは何なのですか」

「魔へ導く者じゃ。それ故、危ないから、ここには近付かん方がよい」

「魔とは何ですか」

「世間では魔界と呼んでおる」

「魔界？」

「だから、魔法使い養成所ではない」

「では、ここで何をなされているのですか」

「魔界を探しておる。弟子と一緒に、この山で。魔界へ導く者、連れて行く者、誘う者、それが魔導師じゃ」

「それで、魔界は見つかったのですか」

「見つかっておれば、こんな山にはおらぬ」

「魔界とは魔法の国ですか」

「そんな国があるなら、オリンピックで全ての金を取るだろう」

「分かりました。勘違いしていました」

「よくあることじゃ」

清武は仕方なく引き上げることにした。そのついでに魔玄堂を見学した。何人かの弟子たちの生活の場であり、研究の場でもあるらしい。

庭には円陣が刻まれている。何度も書き直したようだ。そのまま消さずに残っているものもある。また、石を並べた魔法陣もある。こういうものを研究する場らしいと、やっと分かった。

清武はそれを眺めながら、ここが魔界なのだと思った。

了